

重点取組分野	令和 7 年度		総括
	具体的取組	自己評価結果	
授業改善	これまでの横浜市学力学習状況調査と前年からスケーリングさせた本校で独自に調査した子どもの主体性に即するアンケートのデータを分析し、非認知能力の育ちと研究の効果を合わせながら本校の教育課題に即して、また、子どもの思いや願いや期待を踏まえて今年より国語科と社会科を中心に継続して進めていく。①重点取組の「学び」の成果を授業実践で研究していく。子どもの成長と社会科を昨年度と同様に継続しながら、低学年は新たに国語科で研究していく。主体性を授業改善の主軸において授業改善に取り組む。②研究授業を通して子どもの主体性を引き出す「保護者や子どもが自ら学びを認め、成長を遂げる力を育てる」ための取組方法について検討を継続していく。③教師の教育技術や個々の子どもと集団での話し合いのコーディネートについても合わせて研究を進めていく。	子どもたちが主体的に学びを進めていくためには、学びの導入を工夫し子ども自身の気持ちや思いをもとに学びを構成していくことが社会科、生活科と国語科においても有効なことがわかった。またカリキュラムを工夫し子どもたちにとって自分事となるような学習問題を設定し、具体的な人物や出来事(実社会で活躍されている人や事)について学びを進めていくことで、子どもの主体性が発揮されていくことが校内の職員で共有された。子どものアンケートや学力調査をもとに学習改善に取り組んだ。	B
道徳教育	①全教育活動の中でふれあいや体験活動を重視し、自他を大切にしたいやりの心を持って。②「特別の教科道徳」では、各学年に1度は授業を公開し、道徳教育の充実を図る。③たてわり活動を実施させ、6年生をリーダーに小集団を基本とした活動を通して、主体性、思いやりの心を育てながら自己有用感を高める。④友達や地域とのつながりを大切に、自ら進んであいさつができるようになる。	子どもたちの道徳的心情を育てるために体験的な学習を充実させるよう、福祉教育に取り組んだ。次年度も継続して行いたい。たてわり活動においては、めあてを設定することで年間を通して計画的に子どもたちの主体性や自己肯定感を育てることに寄与したといえる。あいさつについては、返事をすることはできるが、まだまだ自分からあいさつをすることに課題がある。	B
健康教育	①体力テストの結果を分析し、本校児童の課題をとらえ、その課題に合った運動習慣を身に付けることができる取り組みを運動委員会等を中心として設定する。また、金曜日の中休みを運動タイムとして設定し、前年度からの短縄や長縄、ミニマラソンなどの取り組みを生かして、さまざまな運動に触れる機会を作り、児童の体力向上を目指していく。②生活・学習意識調査の心に関する項目の結果から「心の健康」について学校保健委員会等を通じて取り組んでいく。	年間を通して計画的に運動タイムを実施し、全児童が身体を動かす機会を設けることができた。運動委員会主催の外遊びタイムも行い、児童が継続的に運動に親しむ姿が見られた。本年度は、短縄、ミニマラソン、長縄などの活動に取り組み、さまざまな運動特性に触れることができた。	B
人とのつながり	①差別をしない・させない・許さないの意識を育て、相手の立場や気持ちを思いやる優しさをもつ子どもを育てる。②自分の大切さとともに他人の大切さを認めることができ、それが様々な場面等で具体的な態度や行動に現れるようにする。③子どもたちの人権感覚を高め、道徳的心情を育てることを目的に4年生、5年生、6年生児童を対象として福祉教育を、全校児童を対象として人権キャラバンを実施する。	相手の立場や気持ちに寄り添うために、金沢区社会福祉協議会や富岡、能見台各地域ケアプラザと協力して福祉教育を行った。学年での学習においてもケアプラザを訪れるなど、少しずつではあるが意識している姿が見られた。自他の存在や大切さについては頭では分かっているが行動が伴わないことがある。今年度も引き続き人権キャラバンを実施し、だれもが安心して暮らす生活ができるように、一人の問題を自分のこととして受けとめ共に生きていこうとする心を育てよう取り組んだ。	B
いじめへの対応	①いじめ防止対策委員会を月に1回以上開催し、積極的にいじめを認知するとともに、再発防止、未然防止の検討を組織的に行う。②いじめについての研修を行い、教職員のいじめに対するアンテナを高める。③定期的に児童のいじめアンケートを行い、その結果を共有しながら少しの変化も見逃さない体制づくりをする。④「傍観者」に重点を当てたいじめ防止の授業を行い、いじめを見逃さない・見逃さない意識を高める。	記名式、無記名児童アンケートを実施し、結果をもとに児童への教育相談を行い子どもたちの声に耳を傾けるよう努めた。事例に対しては、積極的な認知と解消、組織的対応が一定の成果だと見える。いじめの未然防止に関しては、職員会議の中で研修を行い教職員のいじめに対するアンテナを高めるよう努めた。しかし、事後対応という感が否めない。未然防止の取組について組織的に行う必要がある。また、保護者のいじめへの対策について周知が足りないように感じたため、取組の発信に努めたい。	B
人材育成・組織運営(働き方)	①メンターチームを組織し、自分たちで研修や授業研究を計画し、教科主任や助産者のサポートを受けながら主体的に授業力の向上を図る。②高学年では教科分担を行い、教材研究の時間を確保する。③業務の精選、効率化、情報の共有を図り、教職員の働き方改革を推進する。④週に1回教務会を行い、学校リーダーとして学校全体を見通しながら積極的に学校運営に参画していくようにする。	①体育や特別活動、園工など各主任の先生を講師に招き、研究会を行った。日々の授業づくりにおける悩みを共有し、授業力向上に向けて各自の実践を持ち寄り、助産者から助言をもらったりし、明日の指導へつなげるように学び合いを続け、日々の授業力向上に努めた。②高学年では教科分担を行うことで、教材研究の時間をしっかりと確保できたことで、児童の主体的な学びにつながった。③教室のワークスがけやボール清掃などを外部委託にし、働き方改革を行った。④教務会を週1回行うことで、情報を教務で共有し学年やブロックに素早く情報を伝えることで、学校運営を円滑に進めることができた。	B
地域学校協働活動	①地域の人や材を生かした学習を行い、学びを広げたり、地域への愛着を深めたりする。②学校運営協議会を年4回開催し、保護者・地域と学校教育目標を共有するとともに、様々な教育課題について意見を交換し、学校教育に反映させていく。③「地域の先生」を積極的に活用し、開かれた学校づくりを進める。④授業参観や懇談会、学校説明会、学校・学年だより、学校ホームページ等を通して保護者や地域に日々の教育活動等を具体的に発信し、学校教育への理解を深める。	①各学年地域の人や材を生かした学習を行い、学びを広げ、地域への愛着を深めた。②学校運営協議会を定期的に開催し、保護者・地域と学校教育目標を共有するとともに、様々な教育課題について意見を交換した。③出前授業を通して積極的に「地域の先生」と関わった活動を行い、普段の授業に生かすことができた。④学校における様々な機会を通して保護者や地域に日々の教育活動等を具体的に発信することで、保護者や地域の方に協力していただける機会が増えた。	B
特別支援教育	①支援の必要な児童について個別の支援計画・指導計画を作成する。②校内委員会を定期的に開催し、児童の状況や支援方法について共通理解を図るとともに、教職員全体で情報を共有する。③一般教員による支援を必要とする児童に対して特別支援教室「あおぞら教室」を設け、一人ひとりのニーズに合わせた指導を行う。	支援の必要な児童について、個別の支援計画・指導計画を作成して定期的に見直しを行うべく年間計画を作成した。教職員への情報共有に努め、共通理解を図った。「あおぞら教室」について、統一の書式を用いて担当と担任、保護者と児童の学習状況を共有することができた。担当者による評価を行い、担任にフィードバックを行うことができた。面談等の機会を通して、支援の必要な児童や保護者への働きかけを行ったが支援につながらない家庭もある。	B
児童生徒指導	①「西富スタンダード」について、全教職員で内容の共通理解を図りながら指導にあたる。②定期的に児童の情報を全教職員で共有し、学校カウンセラーやSSW、関係諸機関と連携して関係修復にあたる。③Y-Piアセスメントや日常の児童観察、児童本人の場末等を通じた健康観察などのデータから実態を把握し、「子どもの社会的スキル横断プログラム」を活用しながら受容的な学校・学級風土をつくる。	「西富スタンダード」について、共有されているはずだが温度差があるのが実態である。学校カウンセラーの相談の継続は少しずつ増加している。学校カウンセラーに相談することで、保護者や児童の安心感につながった。Y-Piについては研修に参加し、情報を発信していけるよう取り組んでいる。徐々に浸透してきているので今後もプログラムを広げていきたい。	B
幼保小連携	①就学前までの育ちと学びを生かすためにスタートカリキュラムを行い、円滑な接続を図る。②幼保小職員同士で授業参観や情報交換などを進め連携を進める。③架け橋(義務教育開始前後の5歳児から小学校1年生の2年間)にふさわしい主体的・対話的で深い学びの実現を図ることができるよう、個々の多様性に配慮し、学びや生活の基盤を育む。	①スタートカリキュラムを通して、少しずつ学校生活に慣れ自分ができることを増やしていけるよう取り組んできた。学校のキャラクター「にしむわちゃん」を活用し、子どもたちが学校への思いを高めていけるよう工夫した。②近隣幼稚園保育園の職員に授業参観に来てもらい様子を見守ってもらうことで子どもたちも安心して生活を送ることにつながった。国語や生活科の学習で幼稚園や保育園との交流を意図的に取り入れ、1年間を通して関わっていけるようにした。③園々の様子をこまめに見取り、保護者の方とも情報共有しながら連携していくことで安心して学校生活を送れるようにした。	B

ブロック内評価後の気付き	「富岡中ブロックでの目標は、「Two YOU」①優…「自己にも他者にも思いやりのある子」②勇…「未来を見据え、一歩踏み出し、表現できる子」である。同じブロック内で授業を参観し、児童生徒や学校の様子を相互評価したり、教科ごとに教科懇談会を実施したりした。教科懇談会では、各校の子どもたちの様子や指導方法、育てたい資質・能力を共有し、ブロック内で何を大切に、どのよう教育活動を行うかについて確認することができた。本校の少人数指導や子に合った指導・支援の様子を評価していただき、今後も個に応じた丁寧な指導・支援を継続していきたい。
学校関係者評価	学校教育目標の「実感」「共感」「主体性」を意識したさまざまな活動を積み重ねることで、子どもたちが成長していることが感じられる。また、子どもたちが学校で経験したことをきっかけに興味をもち、学んだことを生活の中で生かしている姿も見られた。学校が時期や内容を見極めながら、子どもたちに適した活動になるように工夫している。地域も学校の教育活動に協力していきたい。地域の人材を活用し、保護者、学校、地域のつながりを大切に、今後も共に教育活動を行いたい。

中期取組目標振り返り	学びの導入を工夫し子ども自身の思いや願いをもとに学びを構成したり、具体的な人物や出来事について学びを進めたりすることで、子どもたちの主体的な学びにつながった。地域の人材を積極的に教育活動を取り入れることで、丁寧な見守りや子どもたちの学びを深めることができた。人権キャラバンや福祉教育などを積み重ねることを通じて、さまざまな人と共に生きていこうとする心情が少しずつ育ってきている。本人や保護者の思いや願いを把握し、個に応じた支援を行うように努めることで、子どもたちが安心感や達成感を得られるようにした。次年度も子どもたちの安心感や達成感をより高められるよう、個に応じたより丁寧な支援に努めたい。
------------	--

重点取組分野	令和 8 年度		総括
	具体的取組	自己評価結果	
授業改善	b1		
道徳教育	b2		
健康教育	b3		
人とのつながり	b4		
いじめへの対応	b5		
人材育成・組織運営(働き方)	b6		
地域学校協働活動	b7		
特別支援教育	b8		
児童生徒指導	b9		
幼保小連携	b10		
ブロック内評価後の気付き			
学校関係者評価			

ブロック内評価後の気付き	
学校関係者評価	

中期取組目標振り返り	
------------	--

重点取組分野	令和 9 年度		総括
	具体的取組	自己評価結果	
授業改善	c1		
道徳教育	c2		
健康教育	c3		
人とのつながり	c4		
いじめへの対応	c5		
人材育成・組織運営(働き方)	c6		
地域学校協働活動	c7		
特別支援教育	c8		
児童生徒指導	c9		
幼保小連携	c10		
ブロック内評価後の気付き			
学校関係者評価			

ブロック内評価後の気付き	
学校関係者評価	

中期取組目標振り返り	
------------	--